

## 第二部 サイレント・クライシス

二〇〇一年九月一日の米国における同時多発テロを契機としたジオポリティックス(地政学的)要因の相次ぐ発生を主な背景として原油価格は一九九〇年代のバレル二〇ドルから二〇〇六年には八〇ドル弱へと上昇した。イラクにおける石油生産の低迷、サウジアラビア東部油田地帯のテロ、中東和平の挫折、イラン、ロシア、ベネズエラ、ナイジェリアと供給懸念の種は尽きなかった。このような懸念を利用した石油先物市場の新たな中心プレイヤーである投機家、金融資本は二〇〇五年、二〇〇六年の二年間に亘り暴利を得た。国際石油資本、産油国も恩恵に預かり、そのつけは世の消費者に回されることとなった。そして、石油需給などのファンダメンタルズに基づく冷静な分析は闇の彼方に葬り去られた。それが二〇〇八年の原油価格暴騰、真のクライシス(危機)へと繋がってゆく。現実の需給とは係わりなく価格が上昇したこの時期をサイレント・クライシス(静かなる石油危機)と称するのが適当だ。

## プロローグ

二〇〇一年九月一日午前九時二分、ニューヨーク上空

操縦桿を握るアルミナの臉には、シェイク・スルタンの顔が浮んでいた。

シェイク、私は間違っていない。

貴方は、懸命に、貴方が信じている正しいイスラムの道に私を導こうとしてくれた。そんな貴方を今でも敬愛している。しかし、私は貴方に従うわけにはいかなかった。貴方は立派な方だが、この世界を変えることは出来なかった。私は違う。今まさにこの手で歴史を変えようとしているのだ。

私には待てなかった。虐げられたイスラムの同胞を蹂躪するものに一矢を報いるのだ。これから悪魔の国のシンボル（象徴）を粉々にしてやる

アルミナは心の中でそう叫んでいた。

世界貿易センタービルの窓ガラスがもう目の前に迫っていた。

「アラーフ・アフバル（アラーは偉大なり）」

「ラーイラハイラー（神は一つ）」

ムハンマド・ラスルーラ（マホメットは最後の預言者）」

アルミナは唱えた。

次の瞬間、アルミナの操縦するユナイテッド航空一七五便は世界貿易センタービル南棟に突入し、たちまち爆発炎上した。北棟にアメリカン航空一一便が突入してから一八分後のことだった。

同日午前九時五分（日本時間同日午後一〇時五分）、東京

「君子！テレビのスイッチを入れてくれ！」

植木一朗は受話器を耳にあてたままそう叫んだ。

君子は慌ててテレビのリモコンを手にとると急いで電源

ボタンを押した。

テレビには、炎を噴き出し黒煙に包まれた世界貿易センタービルの映像が映し出された。

「仰る通りです。確かに、貿易センタービルが激しい勢いで燃えています。一体何が起こったのですか」

帰宅した途端に電話口に立たされた植木は、まるで映画の一場面のような、とても現実とは思えない、その異様な光景を見つめながらそう聞いた。

電話の主は毎朝新聞経済部の吉田記者だった。

「ジェット機が二機相次いで衝突したのです。テロの可能性もあるのではないかと言われています」

「そうですか。テロの可能性があるのですか・・・」

吉田は経団連会館の五階にあるエネルギー記者クラブから電話を掛けていた。周囲の電話の音、ざわめきが植木の耳に伝わってきた。一般紙の経済記者達は、朝刊の記事を書くために一斉に取材電話を掛けまくっている様子だった。

「それで、植木さん、これを受けて原油価格はどう動きますかね」

朝刊の締切を気にしながら、直ぐに吉田は用件に入った。「テロであれば大変なことになりますよ。原油価格は大幅に上昇することになります。何しろ原油価格はこのようなジオポリティックス要因には敏感に反応しますから」

植木は興奮しながら一気に喋った。

石油協会事務局で海外調査を担当している植木は、記者のインタビューに応じる時は、いつも慎重に言葉を選びながらゆっくりと喋るよう心掛けていたが、この時ばかりはテレビの画面に写し出された未曾有の光景に我を失っていた。

しかし、植木には確信に近いものがあつた。

ニューヨークで起こった事件が、直接、石油供給に影響を与えるわけではないが、石油先物市場は敏感に反応する。昨年、二〇〇〇年のシャロン・イスラエル首相の電撃的なアル・アクサモスク訪問後のパレスチナ情勢の緊迫化などもそうだ。

そして、いずれ米国は報復に出る

吉田には、一応、テロであればと判わったものの、植木は民間航空機があんな雲ひとつ無い天気の良い日に、しかも相次いで二つのビルに激突する筈があるものかと思っていた。

電話を切ってから四十分ほど経つと、今度は、ワシントンにあるペンタゴン（国防総省）のビルが炎上したとのニュースが流れ、同時多発テロであるとの見方が固まった。

その後、世界貿易センタービルの南棟、北棟が相次いで崩落、ユナイテッド航空九三便がペンシルバニア州で墜落した。

この同時多発テロ事件は、三〇〇〇人近くの死者を出す大惨事となった。星条旗の威信は大きく傷付いた。

植木の言った通り、この同時多発テロ事件が発生する直前には二〇ドル台半ばだった原油価格が同時多発テロ発生直後は上昇し二九ドル弱となった。しかし、その後、逆にテロ攻撃を恐れた旅客減少などで石油需要が冷え込み大幅に下落することになる。

植木は、自分なりの分析と信念で発言すれば、結果は問題では無いと思っではいたが、世間はそうではない。見通しが当たるか当たらないかに注目するのが常だ。

毎朝新聞の朝刊に掲載された「原油価格は大幅に上昇することになります」という植木の言葉だけが残った。植木は、予測の専門家というわけではなかったが、しばらくの間、内心忸怩(じくじ)たる思いで過ごさなければならなかった。

同時多発テロの翌月、一〇月には、ブッシュ大統領が同時多発テロの主犯をアルカイダと断定し、アルカイダを匿うタリバンを排除するためアフガニスタンを空爆した。

「そうであれば大変なことになりますよ」と植木が懸念した

のはこういうことだった。

同時多発テロ事件を契機とした米国のテロとの対決は、エスカレートしてゆく。そして、このジオポリティックス要因が原油価格を吊り上げる

しかし、空爆を受け原油価格は一時的に二三ドル台へと上昇したものの、その後反落、一月中旬には終に二〇ドルを割った。

原油価格が大幅に上昇を始めるのはおよそその一年後だった。

ブッシュ大統領はタリバン追放に成功し、続いてテロ支援国家として非難をしていたイラクとの対立を深めていった。米国のイラク攻撃の可能性が高まるに連れ、原油価格は上昇を始めた。

そして、米国のイラク攻撃が不可避と見られるようになって二〇〇二年一月中旬以降は、原油価格が急騰しイラク侵攻直前には四〇ドル弱となった。

二〇〇三年三月二〇日、霞ヶ関経済産業省

「困りますね。石油協会の職員がテレビで原油価格が六〇ドルを超えるなどと社会不安をかきたてるようなことを言われては・・・」

石油担当課の若い課長補佐は、植木に向かっていきなり苦言を呈した。

この日、植木は役員に呼び出され課長補佐が怒っているの  
で説明をしてくるようにと言われていた。事なかれ主義のそ  
の役員はとにかく植木に顔を出して欲しかったのだ。謝罪し  
てくれと喉元まで出掛かっていたに違いない。

植木は、いつもテレビのインタビューに応える時には内部  
の了解をとりつけているので理不尽なことだとは思ったが、  
そう言っても始まらない。植木は重い腰を上げ経済産業省に  
出頭した。

「私は、幾つかの前提を置いて、最悪の場合、そういうこともあり得ると言っただけです。いつものことですが、収録三〇分でそのうちほんの一部、それも自分達の都合の良いところ、面白いところしか使わないというのは良くあることです・・・」

植木は続けてインタビューを収録した時に話した内容を簡単に説明した。

課長補佐は、植木を以前から良く知っていたせいか、あるいは上から言われ止む無くそう言っただけだったのか、まるで苦言を呈すれば自分の仕事は終わりとばかりに執拗に追及することは無かった。

植木はホツとする半面、拍子抜けだった。

政府が社会不安を憂いきつく詰問をしてきたら発言の真意などを詳しく説明をして熱い議論を戦わせたのになどと思っていた。

六〇ドル原油などは良いわけがない。そうならないことを祈るが、そうなったら、それこそ各国政府が協調して国民の

不安を拭い去る対策を講じて適正な価格水準に戻すよう努力すべきだし、そうすることは十分に可能なはずだ

しかし、それにしてもこんなことでわざわざ呼び出すとは政府もどうかしている。

植木は無性に腹が立つてきた。

政府は六〇ドル原油を真剣に懸念すべきだ。心底、日本経済、国民生活を考え原油価格高騰を憂い、それに備える必要がある

翌二一日、イラク戦争が勃発したが、瞬く間にバクダッドは陥落し、フセイン政権は一夜にして瓦解した。

原油価格は二〇ドル台へと急落した。

植木は最悪のシナリオが実現しないで良かったと胸を撫で下ろしていたが、これでテロとの対決が終わったわけではないと心の底の不安を完全に拭い去ることは出来なかった。

この時は、二〇〇八年七月に原油価格が一五〇ドル弱になるなどとは誰も思っていなかった。

大手国際石油会社出身者など石油専門家を多数抱えるロンドン、ニューヨークの金融、投機筋が密かにその爪を研ぎ虎視眈々と来るべき石油高価格の時代を狙っていたことなどは知る由もなかった。